



# スクリャービンの足跡

## ——プレトニョフが導く世界

高橋 健一郎(札幌大学地域共創学群教授)

### スクリャービン博物館を訪ねて

2009年3月のある日、学生のモスクワ研修の引率の合間、私は一人でモスクワ中心部のアルバート通りのすぐそばにある「スクリャービン博物館」を訪れた。ロシアの作家や音楽家の博物館の多くがそうであるように、生前住んでいた住居をそのまま博物館にしたものであり、外観はごく普通の昔ながらの建築物である。私が訪れたとき、ちょうど1階の音楽ホールで子供のヴァイオリンのコンクールをやっていたが、私はそのまま2階の展示コーナーへ。四つしか部屋がなく、こぢんまりとしているが、ほとんどすべての物がスクリャービンの晩年の頃のままだに置かれているらしい。

ロシアの小規模な博物館では、職員が待ってましたとばかりに話しかけてき

て、滔々と説明を始めることが多い。この博物館でも、私が大学でロシア語を教え、ロシア音楽の研究にも携わっていることを伝えると、大変感激され、スクリャービンに関する熱い話が始まった。私の前に来館していた音大生と思しきロシア人グループが展示を見ても何も反応を示さなかったと、ぼやいていた直後でもあり、よほど嬉しかったのだろう。一つ一つ展示物を指差しながら、このときスクリャービンはどうしたこうしたと、まくしたてるように語ってくださった。

その中で特に目を惹かれたのは、晩年の傑作『プロメテウス』のためにスクリャービンが実際に使ったとされる発光装置である。スクリャービンは齢を重ねるにつれて、光や色、建築、舞踊、芳香なども取り入れた神秘的な総合芸術を目指していくようになるのだ



モスクワにある「スクリャービン博物館」入口に掲げられたプレート。

写真提供:高橋健一郎

が、その前段階として、この曲で光や色と音楽を重ね合わせる試みをするために、色電球の並んだ装置を用いたのだった。そのことはもちろん知っていたのだが、スクリャービンの自宅で装置の現物を目の当たりにすると、この場でこんなことを本当に考えていたのかと、とても感慨深いものがあった。

この発光装置が作られたのは今からちょうど100年ほど前。それは新しい芸術潮流が次々と生まれ出て、爛熟期の真只中にあったロシア文化が異様なまでの高揚を見せていた時期だった。音楽においては、斬新な響きと複雑なリズムをもつ前衛音楽が一世を風靡しただけでなく、音楽の在り方そのものが見直され、新しい役割を持つようもなっていた。そういう時代の中心に位置したのがほかならぬスクリャービンである。

## 交響曲第1番と神秘的萌芽

1872年にモスクワに生まれたスクリャービンは、ラフマニノフをはじめとする当時の他のロシアの作曲家たちと同様、ショパンの影響の色濃いピアノ小品から作曲を始めた。その意味では紛れもなく後期ロマン派が出发点で

ある。しかし、神秘思想に傾倒し出す1902年頃から、特にヘレナ・ブラヴァツキーの「神智学」に出会う05年前後から独自の和声語法を目指して急速に変貌を遂げていき、調性を超え出た先に「エクスタシー」の境地を見出すようになっていく。これはもともと持っていたエロティシズムの世界とも共鳴しながら、最終的には宗教的な恍惚状態を目指すものである。そしてその成就のために、上述の通り、スクリャービンは音楽の枠をも超え出た神秘的な総合芸術を目論むまでになる。

その変貌ぶりは、例えばピアノソナタを作曲年代順に第1番から第10番まで順々に聴いていけば、すぐに分かるだろう。美しく分かりやすい旋律が十分に聴き取れる第3番までに対して、第4番あたりから徐々に調性の感覚が薄れだし、第6番以降は無調、神秘の世界へと突き進んでいくのだ。

しかし、実はこのスクリャービンの変貌は必ずしも唐突に起こったものではなかった。初期の『交響曲第1番』を聴いてみよう。初めての交響曲ということで、大いに意気込んで書いたのだろう。合唱付きの大曲である。音楽書法の面では基本的にロマン派の枠内にとどまってはいるものの、しかしすでに伝統

『プロメテウス』作曲のために用いられた発光装置を前に、博物館の職員と。

写真提供:高橋健一郎



的な音楽語法からずれた部分が強調されると同時に、エクスタシーを求めるような響きや、宇宙をも見据えたかのような独特な飛翔感、色彩を感じさせる音使いなどもはっきりと見られる。極めつけは、自ら詩を書いた最終楽章の芸術賛歌である。芸術の力をまっすぐ高らかに歌い上げるこの賛歌には、芸術の在り方そのものを変革しようとした後年のスクリャービンの志向の萌芽がすでにはっきりと見てとれるではないか。

こうしてみると、後年の神秘主義的なスクリャービンの音楽は、神秘思想との出会いによる偶然の産物ではなく、むしろスクリャービンが自分の本来の志向を内側からどんどん変革し、そのままその殻を突き破って開けた新たな世界である、と言った方が正確なのではないだろうか。あのモスクワの部屋で培われた晩年の音楽世界と、『交響曲第1番』が内包する世界は、根底でつながっているように私には思えてならない。

さて、この『交響曲第1番』を振るプレトニョフは、言わずと知れたロシアの名

ピアニストにして指揮者である。世界最高レベルの卓越した技術を持つピアニストとして、当然これまでもスクリャービンのピアノ作品の優れた演奏を聴かせてきた。網の目のように複雑で繊細な書法を持つスクリャービンの曲を丁寧な読み解き、細部までクリアに描きながら、多様な音色を繰り広げるさまは見事と言うほかない。しかし、プレトニョフの魅力はピアノという楽器の扱いの巧みさにとどまらない。驚嘆するのは、スクリャービンの音楽に隠れている様々な要素を明るみに出しながら、まったく新しい世界を切り開く大いなる力を感じさせる点である。プレトニョフがピアノという楽器を離れ、指揮活動というより多彩な音楽の世界に向かっていったのも当然の成り行きだったのかもしれない。それは、スクリャービンが楽器の枠を超え出た異次元の音楽を目指したのとも通じるだろう。

スクリャービンの後年の世界をすでに内包する奥深い『交響曲第1番』を、指揮者プレトニョフが一体どのように描き出すのか、興味が尽きない。

たかはし・けんいちろう / 札幌大学地域共創学群教授、日本アレンスキー協会副会長。専門はロシアの言語と音楽。研究、教育と並行して、ピアノソロ、伴奏、アンサンブルなどの演奏活動のほか、楽譜の校訂、解説執筆なども行う。著書に『アレンスキー～忘れられた天才作曲家』他。